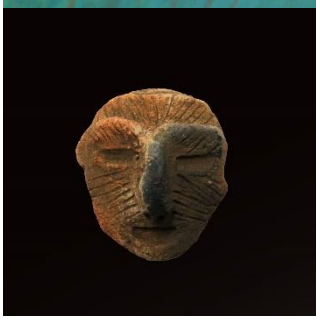
目指せ！　さいたま考古マスター

君に挑戦！　これなんだ？？

第 8 回

さいたまの顔　Part 1

かいせつ



さいたまのヴィーナス　－南区・根岸遺跡出土　土偶－

今から約5300年前、縄文時代中期初頭の土偶の上半身です。南区の根岸遺跡からみつかりました。ヘッドギアのような頭の形が特徴です。この土偶が発見されたときは、目も口もない、のっぺらぼうのような顔と考えられていましたが、同じ遺跡でみつかっていた円形の顔がお面のようにくっつくことがわかりました。円形の顔に吊り上がった目、そしてヘッドギアのような頭をみれば、土偶が大好きな人たちは、これが長野県棚畑遺跡から発見された国宝の「縄文のヴィーナス」と似ていることに気がつくかもしれません。造形の精巧さは元祖「縄文のヴィーナス」には見劣りしますが、この土偶はまさに「さいたまのヴィーナス」といえるでしょう。

みみずく土偶　－岩槻区・真福寺貝塚出土－

縄文時代後期後半から晩期前半にかけて、関東地方に分布していた「みみずく土偶」の頭の部分です。くりくりとした真ん丸の目と口、円形の耳飾りが嵌め込まれた耳など、1960 年代に一世を風靡した「だっこちゃん」を思わせるとてもユーモラスな表情が特徴です。写真の土偶はつくられた当初は赤く塗られており、その痕跡が所々に認められます。「みみずく土偶」の呼称は、真ん丸の目がみみずくの目にも似ていることから付けられたようです。皆さんは、国の重要文化財に指定されているみみずく土偶（東京国立博物館所蔵）が、ここさいたま市の国史跡真福寺貝塚からみつかったことは知っていましたか？

真福寺貝塚や県指定史跡の馬場小室山遺跡をはじめ、さいたま市ではこれまでにもみみずく土偶がいくつも見つかっており、「みみずく土偶の宝庫」ともいえる場所なのです。

みみずく土偶については、また改めてくわしく紹介します。お楽しみに！

※上の写真は、出土した後、ゆっくり乾燥させている状態です。これから丁寧にクリーニングをしていきます。

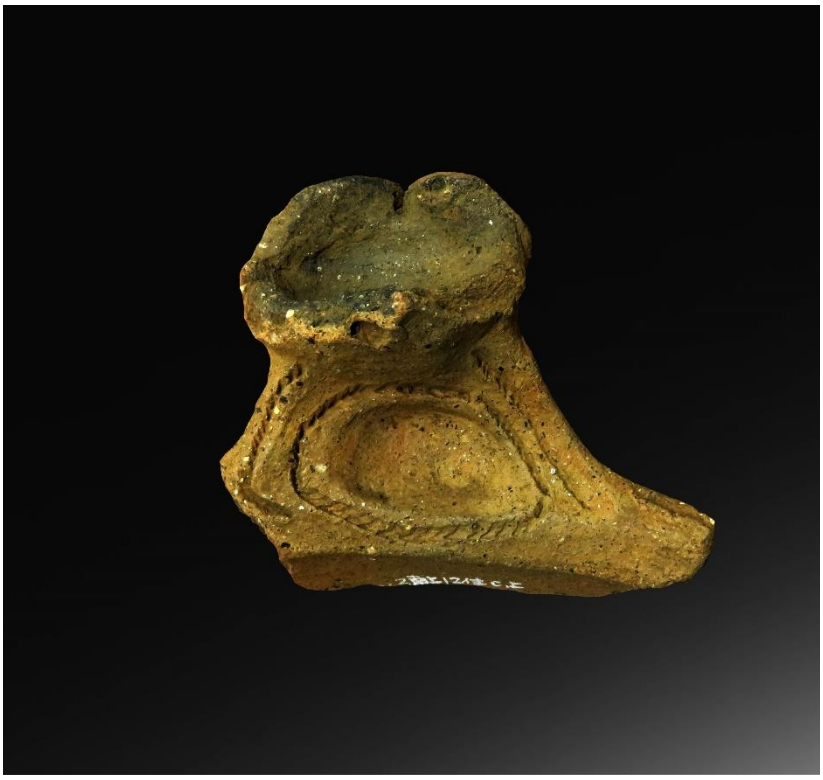
土の中からこんにちは！

顔面把手　その１　－南区・太田窪貝塚出土－

約 5200 年前、縄文時代中期前半の土器につけられた突起に、顔が描かれています。「顔面把手（がんめんとって）」と呼ばれていますが、持ち手でもない飾りの突起に「把手」という名称が付けられているのは考古学上での通称です。

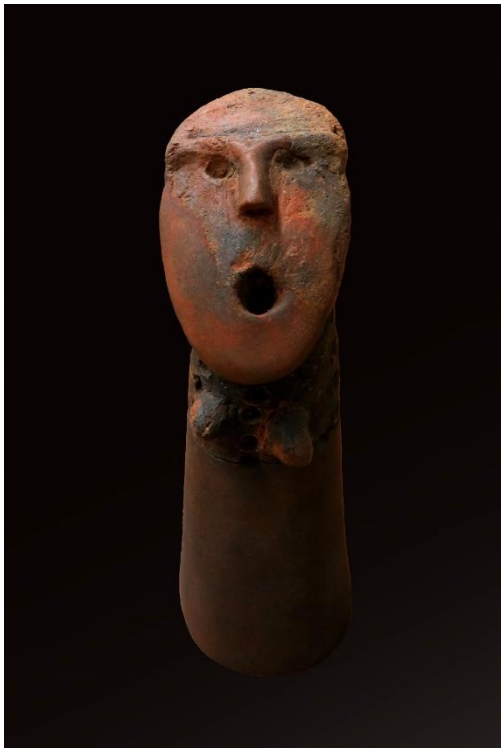
千葉、茨城など東関東地方を中心に分布する阿玉台式土器に顔が装飾されています。阿玉台式土器に顔が描かれることは稀ですが、さいたま市からは南区の太田窪貝塚と緑区の南方上台遺跡で発見されています。太田窪貝塚からみつかった突起は顔が土器の内側を向くように作られており、このような表現は、中部地方でつくられる勝坂式土器の影響を受けているとみられます。土器の縁に頭が付けられている理由ははっきりとは分かりませんが、土器を身体に見立てて子供を宿した母体を表現していると考える研究者もいます。シンプルな表現ですが、笑顔にもみえる柔和な表情は子を思う母の姿かもしれません。

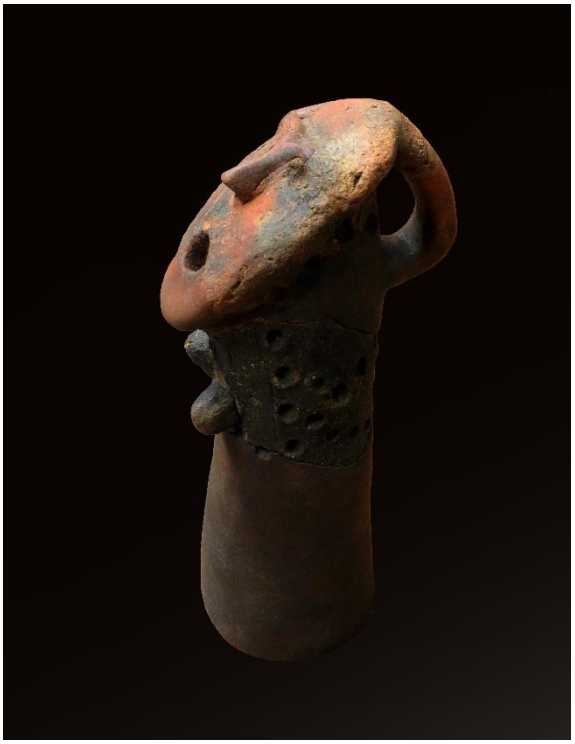
顔面把手　その２　－緑区・南方上台遺跡出土－

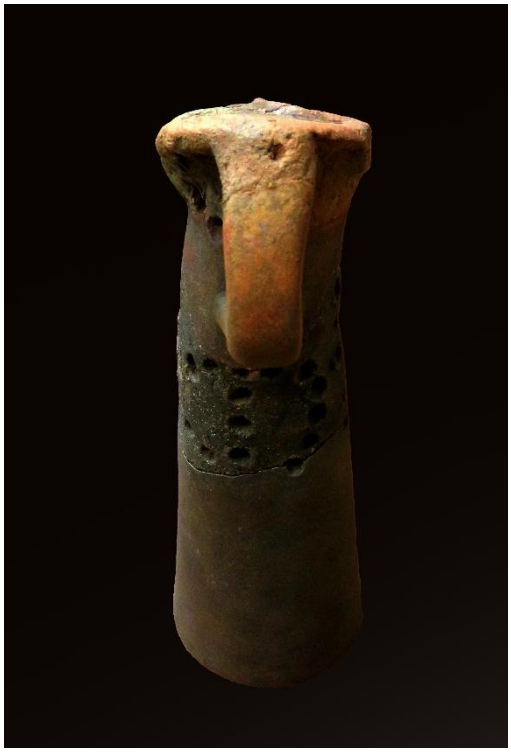


筒形（つつがた）土偶　－緑区・椚谷遺跡出土－

約4300年前、縄文時代後期前半につくられた土偶です。緑区の椚谷（くぬぎやつ）遺跡から発見されました。筒状の体に斜め上を向いた円形の顔が付けられるのが特徴で、「筒形土偶」と呼ばれています。体部には、粘土で貼り付けた乳房のほかに棒で突き刺した文様が描かれています。中期の終り頃になると土偶がほとんどつくられなくなりますが、後期になると勢いを取り戻し、関東地方南部では筒形土偶が各地で出現します。手足を大胆に省略したその形はデフォルメの極致といえ、芸術家岡本太郎の「太陽の塔」を彷彿させるそのデザインには驚かされるばかりです。

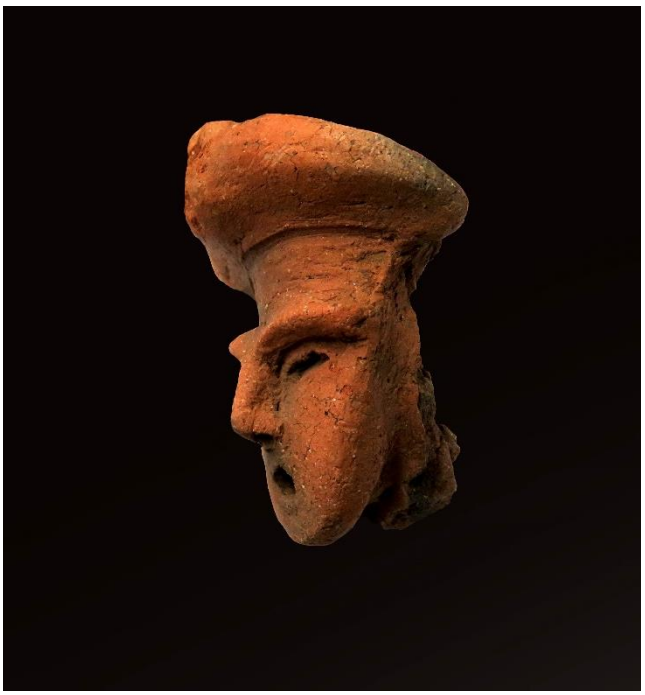




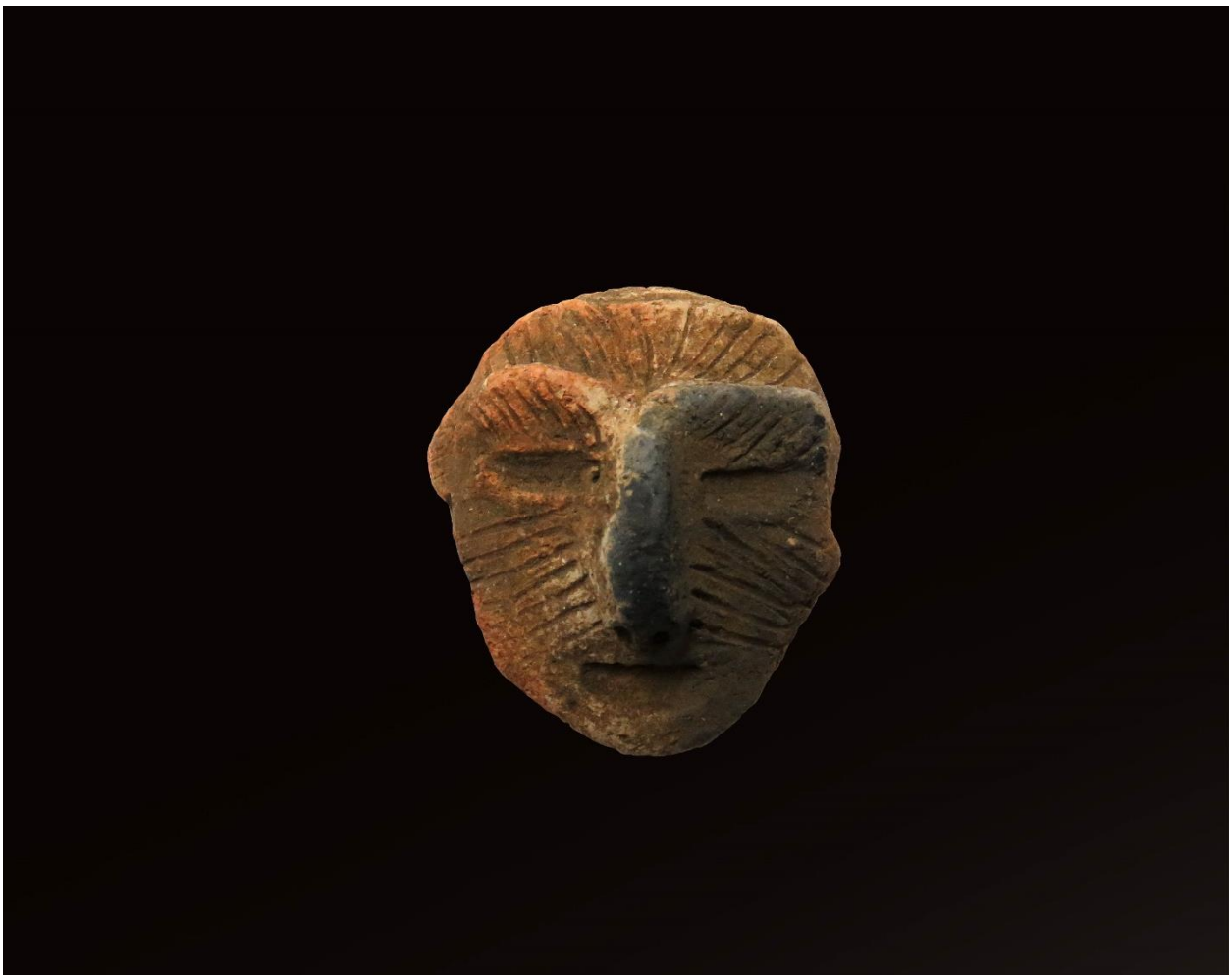


筒形？それとも仮面土偶？　－北区・土呂陣屋跡出土－

約4300年前、縄文時代後期前半につくられたとみられる土偶の顔の部分です。北区の土呂陣屋跡から発見されました。顔のパーツしかみつかりませんでしたので、全体がどのような形をしていたのかははっきりとは分かりません。筒形土偶と同じ形の可能性もありますが、頭の形や表情は、同じ時期に中部地方でつくられた「仮面土偶」とも似ています。仮面土偶とは、文字通り顔に仮面を被ったような表現が特徴的で、長野県中ッ原（なかっぱら）遺跡の「仮面の女神」のように国宝に指定されているものもあります。関東地方では、仮面土偶がほとんどみつかっていないことから、写真の土偶は果たしてどのような形をしていたのか？想像をたくましくすると面白いかもしれません。



黥面（げいめん）土偶　－浦和区・前窪遺跡出土－



縄文時代晩期後半につくられたと思われる土偶の顔の部分です。さいたま市で発見された土偶の中ではもっとも時期が新しいと考えられます。「黥面（げいめん）」とは、「顔の入れ墨」のことで、中国の歴史書『魏志倭人伝』に記された「男子無大小　皆黥面文身」という一節に由来しています。つまり、現在の弥生時代に当たる人々のうち、男性は顔や体に入れ墨を入れていたという記録が残されていて、土偶の顔に描かれた文様も入れ墨ではないかと考える研究者がいます。顔にたくさんの線が描かれたこの土偶が本当に入れ墨であれば、当時の風習を映した重要な資料となります。顔に入れ墨とは、とても痛そうですね・・・。